No.88

日本写真芸術学会ニュース

2026.6.10

発行：日本写真芸術学会会報編集委員会

The Japan Society for Arts and History of Photography.

1. 年次大会案内

令和8年度日本写真芸術学会年次大会ご案内

会員の皆様には益々ご清栄にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。

このたび以下の通り、令和８年度年次大会のご案内をいたします。総会は継続して文書総会とさせて頂きましたが、研究発表会は昨年に引き続き対面形式（オンライン併用）で開催いたします。

本年の研究発表は、10 件の会員の多彩な研究発表を予定しています。また研究発表会に続き、学会賞授与式、そして懇親会も実施いたします。多数の会員の皆様のご参加をお願い申し上げます。

ご参加頂く際には、対面参加オンライン参加問わず、学会 HP の申込フォーム、E メールまたは FAX にて、懇親会へのご出席を含め、事前登録をお願いいたします。

開催日：令和８年７月11日（土）

研究発表会　12:30-19:00
懇親会　　19:10-

会　場：東京工芸大学中野キャンパス５号館
（芸術情報館）１階メインホール

東京都中野区本町 2-9-5

東京メトロ丸ノ内線・都営地下鉄大江戸線
「中野坂上駅」下車　徒歩約７分

● 申　込　先

学会 HP：https：//www.jsahp.org/
Email：jsahp.info@gmail.com
ＦＡＸ：03-6279-8291

年次大会後の懇親会参加費：500 円
申込締め切り：令和８年７月６日（月）

大会案内ページ
QR コード

2.
年次大会
プログラム

令和8年度年次大会　研究発表会

下記の通り令和８年度年次大会 研究発表会を開催いたします。

開催期日：令和８年７月 11 日（土）
研究発表会　12:30-19:00
懇親会　　19:10-

会　　場：東京工芸大学中野キャンパス５号館（芸術情報館）１階メインホール
東京都中野区本町 2-9-5

開会挨拶　12:30 ～ 12:35　高橋 則英 会長

研究発表１（調査口述）　12:40 ～ 13:10
小林 紀晴（東京工芸大学芸術学部）
「日台写真史の交錯――台湾フィールドワークからの考察」

研究発表２（調査口述）　13:15 ～ 13:45
沼田 清（フリーランス）
「同盟通信の内山林之助が撮影した城北大空襲写真」

研究発表３（調査口述）　13:50 ～ 14:20
石黒 敬章（石黒コレクション保存会）
「開業前の東京の駅舎写真発見」

研究発表４（調査口述）　14:30 ～ 15:10
大屋 徳和（株式会社カロワークス）
「三酢酸セルロースベースフィルムの開発と普及に関する研究」

研究発表５（調査口述）　15:15 ～ 15:45
〇圓井 義典（東京工芸大学芸術学部）
上田 耕一郎（東京工芸大学芸術学部）　カワノミオ（東京工芸大学芸術学部）
「各国の主な美術館におけるダイバーシティにかかわる実態調査とデータベース化（第３期）」

研究発表６（調査口述）　15:55 ～ 16:15
〇カワノミオ（東京工芸大学芸術学部）
大和田 良（東京工芸大学芸術学部）　勝倉 崚太（東京工芸大学芸術学部）
「制作コストからみるオルタナティブプロセスの有用性と教育的価値及び持続可能性の検討」

研究発表７（作品口述）　16:20 ～ 16:40
〇中根 健太（株式会社 JXL）
大和田 良（東京工芸大学芸術学部）
「『木の家、白煙の町』における千葉システムを応用したガム印画法による写真表現」

研究発表８（論文口述）　16:45 ～ 17:15
福田 真衣（京都大学大学院人間・環境学研究科）
「『芸術写真家』にとってのミッション・エリオグラフィック――ギュスターヴ・ル・グレイを中心に」

研究発表９（論文口述）　17:30 ～ 18:00
安保 遼太郎（大阪教育大学教育学部）
「日本の初等中等教育段階における写真教育の社会的位置付け」

研究発表１０（論文口述）　18:05 ～ 18:35
◯ fan juwan（范如菀）（国立臺南大学視覚芸術與設計學系）
「AI 時代における写真の変容と課題：台湾における写真の見方および表現の可能性について」

学会賞授与式　18:45 ～ 18:55

閉会挨拶　18:55 ～ 19:00

懇親会　19:10 ～ 20:10　２号館地下１階プレイス（学食）

令和７年度　年次大会会場（東京工芸大学）

令和７年度　研究発表会

3.
関西支部・
第 11 回
研究会

関西支部第11回写真研究会報告

テーマ：「1970 年代以降の関西の写真の動向を考え、アーカイブスの方法論を探る ―版画から写真、そして美術へ。アートとしての写真とは―」

日　時：2025 年 10 月 5 日（日曜日）午後 2 時～午後 4 時
登壇者：鈴鹿 芳康（写真造形作家 / 京都芸術大学名誉教授）
　　中山 博喜（京都芸術大学）、田中 仁（京都芸術大学）
会　場：京都芸術大学大阪サテライトキャンパス 503 教室（オンライン併用）
参加者：対面（会場）12 名、オンライン 13 名

京都芸術大学大阪サテライトキャンパスにおいて、日本写真芸術学会 関西支部第 11 回写真研究会がオンライン併用で開催されました。開会にあたり、会長の高橋則英からオンラインで挨拶があり、鈴鹿さんとは長く付き合いがあり、特に銀塩写真のアーカイバル処理について 1980 年代に話した古い縁に触れ、この時代の写真活動を記録する意義の説明がありました。その後、田中仁（理事）と中山博喜（理事）による鈴鹿芳康さんへのインタビュー形式の研究会が開始されました。鈴鹿さんは、関西の写真文化を語る上で欠かせない 3 名（関西支部第 8 回研究会 / 百々俊二、関西支部第 9 回研究会 / 畑祥雄）の一人として登壇しました。

鈴鹿芳康さんの主要な活動と創作テーマ

多摩美術大学で油絵からアート制作を始めた鈴鹿さんは主に版画による制作をしていましたが、フルブライト奨学金でアメリカ留学中に写真と出会いました。

写真への転向とアーカイブの意識：

アメリカで写真を始めた際、アンセル・アダムスとの出会いなどを通じて、版画に通じる「保存」や「アーカイブ」の重要性、特に写真の現像・定着における科学的な処理を学んだと語っています。

創作のテーマ：「時間」と「縁（えん）」：

鈴鹿さんの制作は多岐にわたりますが、一貫したテーマは「時間」であり、「循環」「再生」も重要な要素です。また、自身の制作や人生が「点と点と点の円（縁）のつながり」で成り立っていると繰り返し強調しました。

主要な作品シリーズ：

セルフポートレート：

自身の人生の記録として継続して制作くしており、特に顔を黒く塗りつぶした上に目だけを残すというメイクを施し、老いを時間の記録として表現するユニークなシリーズを紹介しました。

ピンホール写真と曼荼羅：

母親の死と四国八十八ヶ所巡りの縁からピンホールカメラでの制作を開始。特に八十八ヶ所の土と空の写真を曼荼羅のように構成したインスタレーション作品について言及しました。

家族のポートレート：

20 年間にわたり毎年、自宅近くの同じ場所で家族を撮影した銀塩写真のシリーズを「一番大事」な作品の一つとして挙げました。これは、継続することの意義が必要だったと述べています。

ポラロイドによる作品：

分解撮影した複数のポラロイドを繋げたポートレートシリーズなど、ポラロイドの提供を受けた経緯と共に、その一点性と時間の記録としての側面を語りました。

サイアノタイプ：

等身大のレントゲン写真を利用した巨大なサイアノタイプのセルフポートレートなど、古典技法を大型作品に用いた制作についても触れられました。

写真教育と文化活動：

京都芸術大学（旧京都造形芸術大学）などで長く写真教育に携わるとともに、京都で写真専門ギャラリー（ギャラリー・ドット、プリンツ、イシスなど）の立ち上げにも関わるなど、関西の写真文化の「縁作り」に貢献してきました。

最近の活動：

現在は愛媛に移住し、再生コットン（タオルの廃材）を素材とした紙漉きや、土を使った陶器制作など、写真という枠にとらわれない創作活動を展開しています。

質疑応答

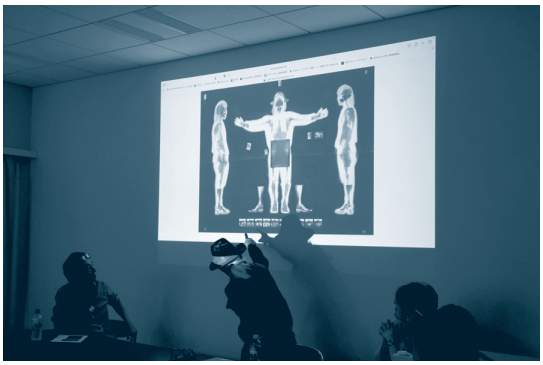
元教え子からの「人生の終焉が近づいた時に、一番思い入れのあると言える作品は？」という質問に対し、鈴鹿さんは 20 年間続けた家族写真を挙げました。また、自身を「写真家ではない」としつつも、美術は形だけではないとし、茶道に見られるような「目に見えない心」や技術を次の世代に伝えることの重要性を語りました。

最後に、高橋会長が「人との出会い、縁、偶然、時間といったキーワードは、写真の本質をよく表している」と総括し、鈴鹿先生の鋭いアーティストとしての感覚が写真に深い関わりを持っていること語られ研究会は終了しました。

鈴鹿芳康さん

高橋会長（オンライン）

田中仁（司会）　鈴鹿芳康さん　中山博喜（司会）



作品解説をする鈴鹿芳康さん

写真撮影　徳永隆之（理事）

4.
関西支部・
第 12 回
研究会

関西支部第 12 回研究会報告

テーマ：「 オーバー８K 高精細映像（画像）の今と VR の新たな流れ」38K 以上の静止画撮影技術とドーム映像やヘッドマウントディスプレイでの 360 度画像の変貌について

日　時：2025 年 12 月 20 日（土曜日）午後 2 時〜午後 4 時
登壇者：赤木 正和（大阪芸術大学教授・日本写真芸術学会理事）
会　場：京都芸術大学大阪サテライトキャンパス 503 教室＊ Zoom によるオンラインとのハイフレックス開催
出　席：対面 8 名、オンライン 6 名

日本写真芸術学会関西支部第 12 回写真研究会では、本学会理事である大阪芸術大学の赤木正和理事に オーバー 8K「高精細映像（画像）の今と VR の新たな流れ」と題して講演いただきました。赤木理事には 12 年前の研究会においても 未来の技術」として 8K 映像や 3D 画像・映像に関して語っていただいており、それらの技術が一般的なものとなった現在、その先にある超高精細映像や VR（仮想現実）技術がどのように進化し、表現の可能性を広げているかについて、具体的な事例を交えて解説いただきました。

まず、8K 映像（横方向約 8,000 ドット）の現状について、かつては 8K で撮影して 4K や HD に切り出す運用が期待されていましたが、実際にはデータ量の肥大化が大きな障壁となっていたことが指摘されました。初期の非圧縮 8K 撮影ではわずか 9 分で 2TB を消費するため、放送や制作の現場では、単に解像度を上げるよりも、4K でのハイフレームレート撮影（120fps など）によるスローモーション表現や編集の汎用性を重視する方向へトレンドが変化しています。

一方で、静止画の分野では スティッチング（パノラマ合成）」技術の進化が目覚ましく、標準的なレンズで撮影した複数の画像をソフトウェアで自動合成することで、数億から 10 億画素クラスの オーバー 8K」画像を容易に生成可能となっています。Exif データの活用による自動補正機能の向上により、手持ち撮影の画像からでも高精細な合成が可能となり、巨大なプリントや細部まで拡大できるデジタルコンテンツの制作が身近なものとなりました。

また、空間表現の新たな潮流として ドーム映像」の活用が紹介されました。大阪芸術大学にある直径 16m の 実験ドーム」では、プロジェクションマッピング技術を応用し、VR ゴーグルを装着せずに複数人で没入感を共有できる空間を創出しています。シミュレーションソフトやシャッター方式を用いた 3D 投影技術の進化により、ホログラムのような実在感ある映像表現も可能となっており、ラスベガスの巨大 LED ドーム Sphere」の事例などを含め、世界的にも映像体験の規模が拡大している現状が語られました。

撮影機材においては、小型シネマカメラの オープンゲート（センサー全域記録）機能や、8K 対応の 360 度カメラ、機体が映り込まないドローンなどの登場により、全方位を記録してから、後編集で見せたい画角を切り出す」というワークフローが定着しています。かつてはハードルの高かった高精細技術が、機材の小型化とソフトウェアの進化によって実用的な表現手段へと成熟しており、現代においては単に解像度を追求するだけでなく、データ容量とのバランスや用途に応じた機材選択といった運用の最適化が重要であると結論付けられました。

5.
第２回
写真教育
研究会

第2回写真教育研究会報告

テーマ「地域と写真教育普及」－写真美術館 / ギャラリーのワークショップ報告－

日　時：2026 年 1 月 21 日（水）　18:30-20:00
開　催：オンライン（zoom ミーティング）
研究報告

東川町文化ギャラリー学芸員	吉里 演子
土門拳写真美術館学芸員	田中 耕太郎
清里フォトアートミュージアム学芸員	土居原 翔司
写真造形作家	河田 憲政（本学会会員）
司会	田中 仁（本学会理事）

参加者　51 名

第 2 回写真教育研究会が 1 月 21 日（水）18:30-20:00 zoom ミーティングで行われました。高橋会長の挨拶につづいて最初に東川町文化ギャラリー吉里さんから「写真の町」東川町の写真教育事業の取り組みについて説明があり、「フォトフェスタ」「写真甲子園」や町内の小中高校の授業内に写真の町を伝えることを行っており、卒園のプレスクールとしてシニア写真教室とのコラボ活動をしている。また平成 25 年から活動している「東川写真少年団」には小学 3 年生から中学 2 年生、35 名が在籍しており月に 2 回、デジタル一眼レフを貸し出して活動している。かつては啓蒙的な指導をしていたが自主的な活動に進展してきて「居場所」としての役割も果たしてきている。この活動に対して東川町文化奨励賞をしています。

吉里さん

ひがしかわ写真少年団の活動

次に土門拳写真美術館の田中さんからは土門拳の弟子たちを講師に迎えた子ども写真教室、ピンホール写真教室（日本写真協会による）、地元作家による青写真ワークショップ（サイアノタイプ）や 2024 年の植田正治展に因んだ庄内砂丘撮影会､大西みつぐとスナップショット撮影会の報告があり、児童学童にとどまらず大人対象のワークショップもあり全年齢を対象としている。「とにかく撮ってみる」「写真の物質性」「撮影行為の社会性 / 個人の眼とその共有」という、初歩的なものから高度な内容のものまで開催しており、基本的に土門拳との関連性を重視しているという。

田中さん

土門拳のお弟子さんによるこども写真教室

次に開館から 30 年を経て昨年一旦閉館し、河口湖へ移転する清里フォトアートミュージアムの土居原さんからは技法の継承としてプラチナプリントワークショップ、写真の原点を体験するピンホールワークショップ、国立天文台との交流によるワークショップ、地域連携として「八ヶ岳生きものがたり」、高校生専門学校大学生の育成の場としてワークショップ提供などの活動報告があり、プリントスタディーの受け入れも行なっている。国際的な連携と若い作家を重視しフォローと教育に重点を置いているとのことである。

土居原さん

プラチナプリントワークショップ

次に、多く美術館でワークショップ講師を務めている河田さんからは、植田正治写真美術館での「制作から額装まで行うフォトグラムワークショップ」、「デジタル撮影から多数のプリントを束ねてつくるパラパラめくる動く写真ワークショップ」や他の美術館での造形教室で「コピーアート紙によるサイアノワークショップ」、「カメラオブスキュラ体験から始めるピンホールカメラ作り」など実施報告があった。

河田さん

植田正治写真美術館でのワークショップ

ディスカッションでは、苦労する点について土居原さんから告知の方法の確認があり、田中さんからは HP などのネット PR, プレスリリース、チラシ配布、地元の情報誌などがあげられた。子供は地元からの参加が多いが、山形県には県立美術館がないこともあり、大人は東北一帯からの参加者が多く東京でなくても参加できることが喜ばれていて、地方貢献を担っているという。　次に、フォトグラム、ピンホール以外でのワークショップの可能性については、吉里さんから写真少年団は 7 年生もおり、長く続けていることから編集 / 写真集作りまで進めていて、生活を豊にしている実感があるという。河田さんからは講師側からの希望として暗室などのアナログ施設のある美術館はそれを生かしていく、メーカーなどの支援を生かしていくことが望ましいとの発言があった。

最後に、各美術館、ギャラリーは所在地域の特性を生かしたワークショップを開催し、地域貢献していることが確認された。

終わりに吉田副会長のまとめの挨拶と 3 月 11 日開催のプリント研究会の告知があり、写真教育研究会は終了した。司会は田中理事がつとめた。

6.
第７回
写真プリント
研究会

第7回写真プリント研究会報告

「写真家と写真プロセスの邂逅に導かれて」

日　時：令和８年３月13日（金）14:00 ～ 16:00
会　場：東京工芸大学中野キャンパス１号館２階 1204 教室
内　容：講演／質疑応答
演　題：「写真家と写真プロセスの邂逅に導かれて」
講　師：久保 元幸（ザ プリンツ プリンティング・ディレクター）
参加者：40 名（実行委員・会員外含む）

日本写真芸術学会では、写真表現において、最も基本的かつ写真作品の根源ともいうべき“プリント”を大切にしていきたいと考えています。現在、写真は身近なコミュニケーションのツールであり、アートの重要な表現手段となっていますが、デジタル技術の急速な発達に伴い、発表の場や方法も多様化し、写真表現そのものも変化してきました。このような時代の流れの中で、写真表現とプリントの今後について会員の皆様と共に考えるため、平成 28（2016）年に「写真プリントセミナー」を開催して好評を博しました。それを受けて平成 29（2017）年度から、研究会を開催しており、今回で７回目の開催となります。今回の研究会では、（有）ザ プリンツの久保元幸氏にご講演をお願いしました。同氏は、1970 年 に写真家小林正昭氏に師事。1988 年にはカスタム・プリントラボ（有）ザ プリンツ」を設立。2009 年には千葉大学大学院融合科学研究科客員教授になられました。2012 年 に（株）アマナサルトのプリンティング・ディレクターに就任され、プラチナ・プリントに特化した工房アマナサルトでプリンティング・ディレクターとして深みのある漆黒の表現を可能にする「アルミナ W コート」という独自の技法を研究されました。同時に国内外の著名な写真家のプラチナ・プリントを制作。2023 年にザ プリンツとして銀塩、プラチナおよび各種オルタナティブ・プロセスのプリントサービスとワークショップを再開されました。

当日は、最初に副会長の吉田が開会挨拶として写真プリント研究会の趣旨説明を行った後、久保氏にご講演をお願いしました。久保氏の 40 年以上にわたるプリンターとしての歩みを振り返ると、氏にとってエポックメイキングとなるような写真プロセスに出会う時、そこには必ず特異な写真家がいたとのことでした。本研究会では、そうした久保氏の心に残る写真家や写真関係者、そして写真プロセスとの邂逅を辿りながらお話が展開されました。ご講演は、以下のような８つのストーリーで構成されました。

(1) 写真家小林正昭氏（故人）とゼラチン・シルバー・プリント
(2) 進藤博信氏、坂田栄一郎氏、目羅勝氏、萩原佳一氏、奈良原一高氏など５人の写真家とマシンコーティングのプラチナ・パラジウム・プリント
(3) 高橋則英氏とマシンコーティング POP 印画紙（Chicago Albumen Works）
(4) 久保田博二氏（マグナム）とハンドコーティングによるプラチナ・パラジウム・プリント
(5) 菅原一剛氏と制作した湿板写真とビッグサイズのプラチナ・パラジウム・プリント（ハンドコーティグ）
(6) 白岩洋子氏・都倉武之氏と福沢諭吉の湿板写真（アンブロタイプ）の複製制作
(7) 杉本博司氏と黒いプラチナ・パラジウム・プリント（世界初・唯一のネガを使用しないアマナサルト方式 ＋アルミナ W コート）
(8) 杉野信也氏と黒いプラチナ・パラジウム・プリント（世界初＆唯一のネガを使用しないアマナサルト方式 + アルミナ W コート）

このように、久保氏がご講演の最初に話題として取り上げたのは、故小林正昭氏でした。小林氏は久保氏が最も長く交際した写真家で、久保氏は小林氏に師事して写真の道を歩くことになったとのことです。技法としては、ゼラチン・シルバー・プリントという、いわば写真プリントの王道ともいえるプロセスのお話でしたが、単なるプリント技法についてだけで

はなく、小林氏の作品のコンセプトや写真の本質に肉薄するお話でした。

３つ目の話題として、本学会会長の高橋氏が行った冨重写真所資料調査に用いたPOP印画紙についてのお話がありました。ここでは、高橋会長が飛び入り的に登壇されて、自ら使ってみての体験談などをお話しされました。

５つ目の話題として、菅原一剛氏と制作した8x10インチのアンブロタイプ（湿板写真の一種）の現場での撮影経験（生撮り）やデジタルとアナログのハイブリッド方式（デジタルデータからポジフィルムを作成して引き伸ばし機で拡大グラスプリントを作成）による20x24インチの湿板写真の制作などについてご説明を頂きました。

７つ目の話題として、杉本博司氏と共に「月下紅白梅図」（80x120 cmのプラチナ・パラジウム・プリント12枚を張り合わせてオリジナルと同寸の二曲一双の屏風）を作成した時のお話を伺いました。

他にも非常に内容の濃い充実したお話をたくさん伺い、全体のご講演の後、参加者全員が大判のプリントや湿板写真などを間近に見ながら、双方向でお話しして頂く機会を持つことができました。参加者の関心は非常に高いもので、時間を超過して質疑応答が熱心に交わされました。今回のご講演を拝聴した印象として、久保氏は単に写真家に依頼されてプリントを作成したのではなく、常に作家の傍にいて、コミュニケーションしながら作品を制作してきた“共同制作者”であったのではないかということが感じられました。そして今日、デジタル技術が中心の時代となり、それに伴って写真プリントが大型化する傾向にありますが、久保氏はアナログの時代から、今日を先取りするようにして高精細な大型プリントの作成などに取り組んでいたことに瞠目せざるを得ませんでした。本講演は参加者にとって、大変有意義な機会となったことは間違いないと思います。ご講演の最後に、高橋会長よりご挨拶を頂き、研究会を無事に終了いたしました。

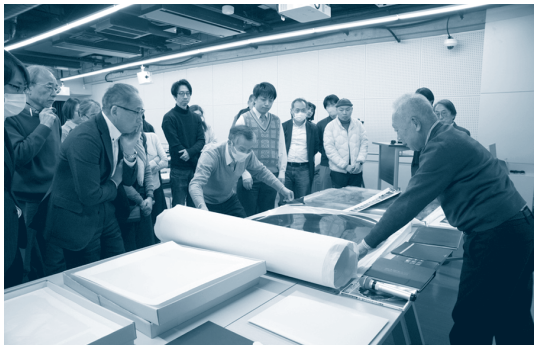
報告者：吉田　成

開会挨拶をする副会長の吉田成

久保元幸氏（講演者）

閉会挨拶をする高橋則英会長

会場風景


写真プリントと講演者を囲んで

7. 理事会報告

令和 7 年度第 5 回理事会 R7.10.1（オンライン会議）

報告連絡事項

1．第 4 回理事会議事録確認
2．8 月・9 月収支報告
3．学会ニュース No.87 発行
4．学会誌 34 巻 2 号＜論文編＞投稿状況
5．関西支部第 11 回写真研究会報告
6．その他（第 7 回写真プリント研究会決定）

審議事項

1．会員入退会手続き
2．協賛依頼（日本写真学会・令和 7 年度画像保存セミナー）

令和 7 年度第 6 回理事会 R7.11.6（オンライン会議）

報告連絡事項

1．第 5 回理事会議事録確認
2．10 月収支報告
3．学会誌 34 巻 2 号＜論文編＞進捗
4．関西支部第 11 回写真研究会報告
5．第 7 回写真プリント研究会案内

審議事項

1．会員入退会手続き
2．令和 8 年度役員選挙日程
3．第 2 回写真教育研究会案
4．その他（写大ギャラリーの広報について）

令和 7 年度第 7 回理事会 R7.12.5（オンライン会議）

報告連絡事項

1．第 6 回理事会議事録確認
2．11 月収支報告
3．学会誌 34 巻 2 号＜論文編＞進捗
4．関西支部第 11 回写真研究会報告
5．その他（関西支部第 12 回写真研究会案内）

審議事項

1．会員入退会手続き
2．令和 8 年度役員選挙・候補者検討
3．第 2 回写真教育研究会進行案

令和 7 年度第 8 回理事会 R8.1.27（オンライン会議）

報告連絡事項

1．第 7 回理事会議事録確認
2．12 月収支報告
3．学会誌 34 巻 2 号＜論文編＞進捗
4．関西支部第 12 回写真研究会報告
5．第 2 回写真教育研究会報告
6．後援依頼（色の国際科学芸術研究センター第 7 回シンポジウム 2026）

審議事項

1．会員入退会手続き
2．令和 8 年度役員選挙・候補者決定
3．令和 8 年度年次大会（総会・研究発表会・学会賞）日程および案内

令和 7 年度第 9 回理事会 R8.3.30（オンライン会議）

報告連絡事項

1．第 8 回理事会議事録確認
2．令和 8 年 1 月・2 月・3 月収支報告
3．令和 8 年度役員選挙結果報告
4．学会誌 34 巻 2 号＜論文編＞進捗、35 巻 1 号＜論文編＞投稿査読状況
5．第 7 回写真プリント研究会報告
6．後援名義使用依頼（フォトシティさがみはら 2026）

審議事項

1．会員入退会手続き
2．令和 8 年度年次大会関係スケジュール案（理事会・行事）
3．学会事務局外部委託検討

8. 入会・退会者一覧

令和7年度第5回理事会（R7.10.1）から第9回理事会（R8.3.30）までの承認分（50音順・敬称略）

〔入会者・正会員〕

川上 靖、川畑里菜、熊倉 徹、中井陽一郎、山口孝子、山下恒夫

〔入会者・学生会員〕

今井正和、谷平達矢、劉 暁琪

〔退会者〕

安西英一、川上 洸、神山百合子、杉村 昇（逝去）、竹内万里子、塚本洋三、西村英之、平野雅俊、鹿田典夫

日本写真芸術学会 事務局

〒 174-0051 東京都板橋区小豆沢 2-9-19
TEL：03-6279-8290　FAX：03-6279-8291　mail : jsahp.info@gmail.com

日本写真芸術学会誌 令和９年度 第36巻・第１号
掲載原稿（論文・記事）投稿募集のご案内
（投稿料、掲載料とも無料）

学会誌は学会の重要な研究発表の場です。会員の皆様には益々活発な研究成果の発表・投稿をして頂きたくお待ちしております

近年、投稿も様々な視点からのものが増えて参りました。継続して審査も一層の向上を図り、学会誌の充実に資して行きたいと考えております。

学会誌〈論文編〉につきましては、令和４年度より投稿料・掲載料とも無料となっています（通常通り査読は行います）。会員の皆様の活発な投稿をお待ち致しております。

詳細につきましては学会誌巻末または学会ホームページ内の「投稿規定」をご覧ください。

―― 記 ――

投　稿　締　切　日：令和９年２月末日（投稿予定の方は令和８年12月中に事務局までお知らせ下さい）

＊学会HPの論文投稿申込フォームからお申込み頂くか、又は所定の申込書を添付して、投稿論文を期日までに学会事務連絡先までお送り下さい。

＊原則として投稿論文はメール添付、CD送付等によるデータ入稿をお願い致します。テキストデータの他、ページレイアウトのわかるPDFデータ（英文タイトル、アブストラクトを含む）および論文に必要な図、表、写真原稿等のデータも別途お送り下さい。

＊ 令和９年３月中に査読審査の上、ご連絡の予定です。

発　行　予　定　日：令和９年６月

投稿論文等の数が極端に少なかった場合、またその内容や査読審査の結果によりやむを得ず発行を休止することもありますので、ご了承下さい。

キリトリセン

論 文 投 稿 申 込 書

年　　月　　日

日本写真芸術学会誌 [　　] 号へ論文の投稿を申し込みます。

氏名		会員番号	
連絡先	〒	電話	
		メール	
題名		原稿	原稿用紙 約　　字
		形態	
論文概要			
事務局欄	年　月　日受付	整理番号	

コピーをとってご利用下さい。